

2019
おもろ
チャレンジ

レゾエミア教育と森の幼稚園から考える 自然と人間のつながり

教育学部 3年
中山 貴美子

医学研究科修士課程 2年
TRINH THANH HAI

デンマーク、イタリア

2019年8月21日-

2019年9月25日



渡航概要と内容

・目的

五感が最も鋭い幼児期に、自然の中で遊ぶことや自らの手を動かして何かを作ってみるということが、自然と人間のつながりについての考察を深めていくうえでの土台となっていくのではないかという仮説を検証すること。

・背景

私は「よりよい教育とは何か」についてずっと興味がある。それは、「なぜもっと自由に自分の勉強したいことを勉強できないのだろうか?」「果たして今の日本の教育のシステムが生徒の可能性を最大限に引き出しているのか?」といった小中高と教育を受けるなかで抱いた教育に対する様々な疑問が自分の中にあったからだ。

そして現在、私は「人間らしさとは何か」ということに興味がある。今まで学校の教室の中の人間やその人間関係のことについて考えてきたが、そもそも人間は人間だけで生きているわけではない。人類が誕生した瞬間から自然と共に生きてきたし、現在もこれからも人間は自然と共に生きていく。「自然と人間のつながり」を考えることは、地球の未来にとっても重要なことだしなにより人間が人間らしく生きていくために重要なことであると思った。

・活動概要

I 8/21~9/1 *デンマーク オロ

LAND (Learning, Activities, Network and Demonstration center for Permaculture.) センター滞在

8/28 Børnehuset Fugleredens (シュタイナー自然幼稚園) 見学

9/2 コペンハーゲン プレイパーク視察

II 9/3~9/11 イタリア レッジョエミリア滞在

9/4 ローリス・マラグッツィセンター見学

9/9 ドキュメントセンター見学

-----Hai 帰国

9/10 Regina Pacis Nursery School (レッジョエミリア幼稚園) 見学

III 9/12~9/25 *デンマーク グレーノ滞在

9/12 Børneøen Bonsai (森の幼稚園) 街頭インタビュー

9/23 Børnehaven Savværket (自然幼稚園) 見学

* 宿泊費と食費を浮かせるため、デンマーク滞在中には workaway(旅するボランティアとホストをつなぐ国際的マッチングサイト。ボランティアは 1 日数時間労働力を提供し、ホストは食事と宿泊施設を提供する。)を利用した。結果的に大変良かったと感じている。デンマーク人の毎日の暮らしから今回のテーマにせまることができたからだ。

* 今回「森の幼稚園」ではなく、「自然の幼稚園」を見学した。「森の幼稚園」と「自然の幼稚園」の最も大きな違いは園舎があるかないかである。

・活動内容

I デンマーク オロ

パーマカルチャー (人間にとっての恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系のこと。パーマネット、アグリカルチャー、カルチャーの 3 つを組み合わせた造語である。) を実践するホストの家に約 2 週間泊まり、持続可能な生活をリアルに体験した。

ホストの家は彼女が大部分を自分で手直したそうである。家の柱を木で、壁は土から作り、その壁の中には断熱材として近所の羊からもらった羊毛が埋め込まれている。熱を逃がさないようにリビングの中心に暖炉を作るなど様々な工夫をして、環境にやさしくかつ自然感たっぷりの家である。毛布やストールなども同じく近所の羊の毛から自分でフェルトして作ったそう。自分の理念を実施するのに時間と暇を惜しまない姿勢がうかがえる。単にパーマカルチャーという概念を提唱するだけでなく日常生活から実践する姿は感動した。

持続可能な生活といえばまず自給自足の生活を思い浮かべるかもしれない。実際、この家にはフォレストガーデンと呼ばれる広いガーデンがあった。正直なところ初めてみたときには草ばかり生えているのだと思ったが、草は草でも食べられる草だった。私たちはガーデンを案内してもらいながらそれぞれの植物の名前、味、調理法などを知った。ホストは何年もかけてこのガーデンを作り、また何年もかけて何がどんなふうに使われるかを自分の舌で研究したそうだ。そして、多種多様な植物を育てている理由についても話してくれた。それは生物の多様性を尊重するためである。生物が多様であればあるほど、災害や悪天候などに対する環境のレジリエンスが高まり、その結果、様々な状況下においても食料の供給源が確保できたり、土地が持続可能なものになる。



また、そのガーデンにはビニールハウスが一つあり、その中でトマトやキュウリ、ブドウなどを育てていた。植物だけでなく、四羽の鶏と六匹のひよこ、そして四匹の鴨もいた。毎朝タンパク質のため卵をとる。

また、持続可能な生活のため、水の循環が大事だということも学んだ。キッチンやバスルームで使う水もすべて畑に流れるのだという。だからシャンプーや洗剤なんかは少量で使うようになった。リサイクルも忘れない。コンポスター（枯れ葉や家庭からでた生ごみなどの有機物を微生物や菌の力で分解発酵させ堆肥にするための容器）に入れる生ゴミも、多様性があつた方がいい畑になりそうだからできるだけ分別して何でもかんでも放り込む。食べる(生活する)→土に還す→食べ物を頂くというサイクルがそこにはあつた。

この庭で私たちは多くの時間を過ごすことになる。野菜や果物、お花などの土づくりや水やりをしたり、動物たちに餌をあげたり、鴨の池の水を変えたり、薬草を摘んでブーケを作ったりした。毎日単調ではあるが、持続可能な生活を体感した。このように、パーマカルチャーというのは単に概念ではなく、一つの生活の営み方であり、生き方であることを学んだ。

ここで一つ気づいたことがある。それは、私たちは普段商品に対して対価を支払っているが、それ自体の価値に対して支払っているわけではないということ。実際にはその商品を仲介してくれる「人」に対して支払っているのだ。これは当たり前のことかもしれない。しかし、なんとなく物それ自体に値札通りの価値があるように感じてしまう。自然からはただでもらっているとい

うことを忘れてしまう。例えば、いつもお世話をしている鶏から毎朝頂く卵は無料だから価値がないと言われてたらそうじゃない。お金を支払っているから、いつもはなんとなく命を頂いているという負債感を感じることなく生活しているが、実際にはその負債感をお金で片付けることはできないのだろう。



8/28 シュタイナー自然幼稚園 見学 Børnehuset Fugleredens

(A) 活動のリズム

先生たち（3人の監督保育士と数人のスタッフ）が細かな指示を出したり声を荒げたりすることなく、穏やかに園児たち（0～2歳児12人と3～5歳児20人）の活動が行われていた。それは日々のルーチンが決まっており、子供たちが次に何をするか把握しているからだという。曜日ごとに違う内容だが、毎週同じ内容で行うため子供はパターンを認識することができるのだ。毎日、毎週、そして季節ごとのリズムがある。

(B) 理念

「ここで園児たちは、世界は素敵で面白い場所だということを学ぶ」とはある先生の言葉である。その言葉通りのことがここでは実現されているような気がした。先生の態度や周りを取り巻く環境それ自体から子供は多くを学ぶ。子供たちは大人の言葉、行動、そして感情を模倣する存在であるという認識のもと、ここにいる先生たちは自らの行動に責任を持っている。

(C) 遊び

おもちゃは自然の素材でかつシンプルなものだけ。だからこそ、子供は自分の創造力を生かすことができる。例えば木の棒を例に挙げてみよう。子供の創造力によってそれは釣りをするための棒になったり、鉄砲になったりする。また、この園では自由に遊ぶ時間をとても大切にしている。子供は先生から学ぶよりも、遊びの中で学ぶことのほうが多いと考えているのだ。絵を描く時にも、自分で考えて創造することに重点を置くため、やり方を教えるようなことはしない。ある先生は、舟を書いて見せてそのあと生徒全員同じ絵を描くようになってしまった経験からそれ以降見本を描いてみせたりはしなくなったと話してくれた。

(D) 歌

この園では、一日のうちに何回も歌を歌う。体の使い方や手先の発達を促すような運動と組み合わせた歌もある。例えば、子供たちが手をつないで円になって体を動かし代わる代わる円の中心にいくような歌(同じ歌を1～2週間繰り返す)や、手遊びの歌(一か月繰り返す)がある。

(E) 食事

食べ物はすべてオーガニックで、その土地でとれた旬の食べ物を使用している。健康で丈夫な体作りのためであることもそうだが、食べ物で季節を知ることや、自然の摂理に従うことを学ぶためでもある。実際に年に2, 3回農園に行ってみ学する機会もある。



(F) 環境

一言でいうと自然と文化が調和した環境といえる。園舎は木造で、まわりには木造の小屋があり、園庭には広い芝生が広がっている。園舎の中の家具やおもちゃ、園庭の遊具もほとんどが木製で、木のほかには金属、綿、ウール、絹で作られたやはり自然のものが使われていた。園舎の中に入っても自然の4つの組成(火、水、土、風)を感じさせるための工夫(ろうそくで火をともしなど)がなされている。窓やテーブルには季節の花が飾ってある。そのおかげでぬくもりのある家庭的な空間になっており、これなら親と離れて過ごしても寂しくないのではないかと思った。園庭も安全でかつ子供が思わず遊びたくなるような刺激に満ちた空間設計がなされているように感じた。

(G) 組織

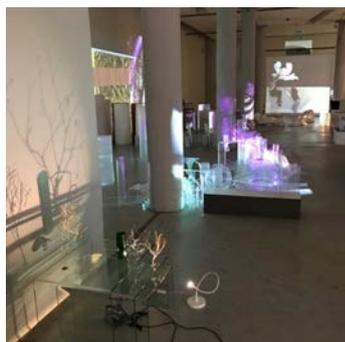
総会(年に一度すべての親とスタッフが集まり議事録も共有される)、臨時総会(5人以上の子供の両親から要請があった場合二週間以内に開かれる)、理事会の三つがある。また、親と先生とで取り結ぶ定款があり、投票有権者の3分の2が賛成すれば修正案が採用される。幼稚園にこのような民主的な制度があることに驚く。



II イタリア レッジョエミリア

9/4 Reggio Emilia Loris Malaguzzi Center 見学

- (A) 多くのコーナーで素材のコレクションを展示している。例えば、絵具、紙の素材、プラスチックの素材など…。それぞれの物に異なる材質が集められている。紙を例に挙げると、トイレットペーパー、光沢紙やセロハン紙など。絵具では、オイルや、パステル、鉛筆カラーなどがある。様々な物に触れる体験をすることで、五感を内側から育て、多感覚や鋭くさせることができるのではないかと感じた。自分の知っている範囲をどこまでも超えてゆき、物を知る前のものの見方を実感したときにはじめて物事の全体を見ることができる。
- (B) 最新技術を使い様々な角度からみることがコーナーもあった。プロジェクターで様々なものを組み合わせ、それを映し出すことによって幻想的な世界を映し出す。このような、人間の知覚を後押しし、新たな世界を見せてくれるような機械との出会いは素敵なものだなと感じた。また、子供の発想を実現化してくれるドラえもんのような存在にプロジェクターになれることを知った。
- (C) ものに対する子供の認識・見方を紹介するコーナーもあった。例えば、栓抜き。こどもはこれを踊る人や、ワニ、飛ぶ鳥、などと言う。どれも見え方には嘘がない。また、先生からも違う見方を提案することもできる。フォトコピー機を使い違う角度から栓抜きの写真を撮るなどしていた。
- (D) センターの内部にあるブックコーナーではセンターの発行した書籍が全て揃い、様々なプロジェクトを見ることができる。本のほかにもレッジョエミリア幼稚園のドキュメンテーションも見ることができる。



9/10 Regina Pacis Nursery School レッジョエミリア幼稚園 見学

印象に残っているのは、子供も保育者も両方がのびのびと自分の興味の赴くままに活動しているということである。例えば、子供の興味が変わって一人別のことをし始めても、先生は何も言わない。そして少し時間が経てば、また戻ってくる。

どうしてそのようなことが可能なのか。

一つ目の理由として考えられるのは、保育者のビジョンが明確でかつ長期的なものだからである。だからこそ、目先の子供の成長にこだわったりしない。そしてそれは、ドキュメンテーション(一年を通した園児の活動を写真入りでまとめたもの)の活用が大きいのではないかと感じた。先生たちは1週間に一度、コンセプトマップをもとにプロジェクトの進捗を振り返り、新たな方向性について話し合う時間を2時間設けるのだという。このように保育士自身が理論と実践の応用を目指している姿に驚いた。

二つ目に、常に一つのクラスで二つの選択肢があったということである。(子供10人に対し先生が1人付き、1クラスは20名の園児がいる。園児の年齢は3-5才で異年齢編成。4クラスある。)例えば、ある小グループは砂遊びをし別のグループはお絵かきをする。子供はすぐに興味が移るからこそ、自分で何をしたいかを決定させる自由が必要なのだと話していた。



9/3-9/11 レッジョエミリアの歴史

レッジョエミリア教育は、その提唱者であるローリス・マラグッツィの「こどもたちの 100 の言葉」を抜きにして語れない。以下抜粋して引用する。

「子供たちの百の言葉」 ローリス・マラグッツィ
子どもには 百とおりある。
子どもには 百のことば 百の手 百の考え
…
けれど九十九は奪われる。学校や文化が 頭とからだをバラバラにする。
…
そして子どもにいう 遊びと仕事 現実と空想 科学と想像 空と大地
道理と夢は一緒にはならないものだ。
つまり 百なんかないという。
子どもはいう
でも、百はある。

この詩からは、西洋的な二元論を否定し、多様な世界の見方があることを強調するようなマラグッツィの強い意思が感じられる。この力強い詩には、レッジョエミリア市、そしてイタリアという国が辿ってきた歴史が背景にある。第二次世界大戦時、レッジョエミリア市はムッソリーニ率いるファシスト党に抑圧を受けていた。レッジョエミリア市は、もともと強力な社会主義が育ってきた街であり、(国土、平和、愛国心を表すトリコトールの国旗が採択された地域でもある)多くのレジスタンスやコミュニオンを形成していたからである。そして、戦後 Villa Cella と呼ばれる小さな村の女性たちが戦車や馬を資金源に、ローリス・マラグッツィと共に学校を設立したのが全ての始まりだったらしい。

「Loris Maraguzzi and the Schools of Reggio Emilia」という本の中で 1962-1976 年に市長を務めた Renzo Bonazzi が当時こんな風に述べている。

「ムッソリーニやファシスト党は私たちに従順な人間は危険な人間であることを知らしめた。戦後新しい社会を築こうと決めたとき、私たちは子供達が自分自身のために考えることができた、活発で批判精神のある市民になるための条件が整えられた学校が必要であることを理解していた。」

この言葉どおり、レッジョエミリア市は財政的にも政策的にも教育の再建に力を入れ、全ての市立幼稚園を今なお続くレッジョエミリア方式にすることを成功させる。その市民の戦いは各小学校に置かれた記念碑にその影を見ることができる。



Ⅲ デンマーク グレーノ

七歳（小学一年生）の女の子と23年世界を旅してきたお母さん、三匹のうさぎと一匹の犬が住む家で約二週間デンマークファミリーライフを送った。この家族との出会いは私にとって非常に大きく、今でもこの家族から教えてもらったものについて考え続けている。ここではトピックを3つに絞ってみた。

①お母さんの教育観

女の子がいくら大声を出したり、私には危険と思われるような高い高い木の上まで登ったり、食事を中断してお母さんにべったり甘えたりしても決してお母さんは「やめなさい」といわない。女の子がやりたいようにさせ、懐深く見守っているだけだ。逆に、女の子の意味不明な遊びに加わったりもする。私が二週間一緒にいて一度だけ見たお母さんが叱っている場面というのは、女の子が自転車でトラックの前を果敢に横切ろうとしたシーンだけだ。その場合でも、叱る（「よく言い聞かせる」という表現の方が近い）時間というのは五分にも満たなかった。親子関係で叱るという行為はこんなにも必要がないものなのかということを知った。

なぜそのようなことが可能なのか。まず、第一に女の子の通っている小学校の宿題が大変魅力的であることがあるだろう。（インターネットのゲームソフトでアルファベットの発音やスペルを学んだり、秋を感じたものを三つ絵に描いたりする。）よって女の子は自発的にその宿題に取り組むため、お母さんは宿題のことで叱る必要がないのだ。おそらく、日本のお母さんが最も怒りモードに突入しやすい親子の会話ランキング第一位は「宿題終わったの？」ではないだろうか。子供の成長と幸福を心底願っているだけに、心を鬼にしても叱って宿題をさせる親は多い。子供が自発的に楽しく宿題に取り組むことができたらいふことないだろう。

第二に、女の子を私の子供としてだけではなく、一人の人格を持つ人間として接しているということ。お母さんは緑色が大好きで、服も家具も部屋全体もどこもかしこもこの家の中はみんな緑色なのだが、唯一女の子の部屋だけはオレンジ色である。女の子の服もバッグも靴も女の子が好きなものを自分で選んだというような印象である。習い事も（本当はボーイスカウト

に入っただけで欲しかったようだが) いろいろ試させて自由に好きなものを選ばせている。また、りんごを取ったり動物を庭まで運んだりするような少々大変で重要な家の仕事も女の子を信頼し任せている。

第三に、女の子に世界の美しいものをたくさん触れさせることで女の子の好奇心を刺激しているということだろう。(第一に挙げた理由の前提条件として、そもそも女の子の中に好奇心が育っていなければいくら宿題が魅力的でも自発的に取り組む行動は生まれない。) 家の中を見ても、お母さんが世界を回って見つけてきたのであろう絵画や置物、本であふれている。階段には日本の浮世絵がずらりと並べてある。また、休日には車で文化遺産(親子のお気に入りの場所がいくつかあるらしい)を巡ったり、海や山が近いので自転車でそこまで出かけたりする。私も、いくつか一緒に連れて行ってもらい数多くのデンマークの美しい自然や文化遺産を見せてもらう中で、この土地に対する興味がわいてきた。人は、心を動かされたときにはじめてもっと知りたいと思うのだろう。

第四に、これが最大の理由だと思うが、女の子と過ごす時間を心から楽しんでいるということだ。お母さんは、一日の多くの時間を女の子と共に過ごす。(ちなみにお母さんの職業は、小さなペンションの経営者兼デザイナーである。そのため、家にいる時間が多いのだ。) 数多くのボードゲームや鬼ごっこと一緒に笑い転げながらしたり、毎晩夜寝る前の一時間程度、本を読んだりぺちゃくちゃおしゃべりをしたりしながら布団の上で女の子と一緒に過ごす。このようにして、親子は毎日の日常生活それ自体を楽しんでいる。



②ライフスタイルから見たデンマーク人の価値観

実は、この親子と過ごす最後の休日の朝、私とその女の子の間には少し不穏な空気が漂っていた。それは、私が親子とサイクリングするのではなく今日は家の周りをぶらぶら歩いてスケッチしたいと言ったことから始まった。(物語作成のためにスケッチをしたかったのもそうだが、正直、自転車で遠出するまでの体力が私には残されていなかった。) 女の子は不服そうな顔

をしたため、私は自分が児童文学サークルに入っていることやこの環境は物語を考えるのにうってつけであることを話した。女の子は、「こんなにお天気がいい日なのにどうして？スケッチなんていつでもできる！それに今日は最後の休日なのに…。」となかなか納得してくれなかった。するとお母さんが苦笑しながら「デンマークでは、休日は外に遊びに行くものという考え方があるから」と私に女の子の気持ちの背景にあるものを説明し、女の子には休日是一个人一人違うスタイルの過ごし方があることを説明した。そのおかげで何とか私たちの気持ちのすれ違いは改善された。

ここで、私はなぜここまでこの親子は元気なのかということ考えた。この親子だけではない。もう寒い季節だということに海の中で家族が遊んでいたりと、年配の夫婦がロードバイクで街中を走っていたりする。日本ではちょっと考えられない。デンマークの人は年齢問わず、寒さに強いのもそうだが休日や余暇の過ごし方がとてもアクティブなのだ。

おそらく、それには様々な要因があるのだろうが一つ言えることは、デンマーク人には休日にそこまでのことをする体力が残されているということだろう。そして、ここからはまた親子の話に戻るが、この親子がここまで元気である秘訣はやはり「何事も楽しむ姿勢」ということにあると思う。私は最初、この家で仕事をする際その仕事に慣れていないこともあり、まず言われた通りにやることに必死だった。そして、次に私が目指したことはいかに効率よく終わらせることができるかだったが、始終楽しそうにもものすごいスピードで作業するお母さんを見て、私も「自分が楽しむ」ということに焦点を合わせ始めた。最初、仕事のスピードがおちたように感じたが最後の二日間はお母さんが少しびっくりするほど仕事が早く終わった。

人間の楽しむ能力というものは、とてつもないエネルギーを生み出し新たな能力を次々に開発するキング of the 能力なのではなのかもしれない。そして、ここデンマークでは楽しみながら学んだり、楽しみながら働く権利が保障されているように感じるのだ。

③女の子から教えてもらったこと

女の子とは（私はデンマーク語がわからないので）お母さんの翻訳を通じて会話をしたり、ジェスチャーでコミュニケーションを取ったりしていた。また、遊ぶことに関しては私たちの間に言語は全く不要で、お互いの国の遊びを教え合いっこしながら楽しんでいた。彼女と遊んでいるうちに側転ができるようになったという衝撃的な事実からわかるように、わたしも彼女も思い切り全力で遊んでいた。

そしていよいよ最後のお別れの時が来た。彼女と思いきりハグして別れ、私はまだ暗い道を歩き始めた。するとお母さんが二階の窓から何かサヨナラの言葉を言った。私も振り返って「Goodbye！」と叫んだ。そして、またバス停に向かって歩き始めた。そのときだった。彼女が、「キミコ、ファベル！」と叫んだのだ。私はその言葉の意味を全く理解できなかったのにも

関わらず、強烈に彼女の思いが伝わってきて胸が熱くなった。私には、「がんばれ」という風に聞こえた。私は、言葉というものはこういうものであったのだという風に目が覚める思いだった。言葉の意味が分からなくてもその響きだけでその思いが伝わってくる。

感情というものは嬉しいとか悲しいとかそんな単純色で飾られるものではなく、もっと複雑な色をしている。だから、表現のための言葉なんてそうそう簡単に扱える道具ではないのだ。それでも伝えたいと思ったときに頼るのが表現のための言葉なのだろう。



・渡航中に日本との文化の違い等から苦労したこと

もしかしたら、これは日本の文化のせいではなく自分自身の問題なのかもしれない。しかし、日本の教育にもその一因があると思うので書いておこうと思う。私が渡航中最も苦労したことは、自分の思いや考えを相手に伝える、伝わるということだ。そして、それは元をたどれば会話の最中に「一人称」で考えるくせがついていないことが原因なのではないかと感じている。

・渡航中に起こったトラブルとその対処方法

①空港にスーツケースが届かない

ブリュッセルを経由してデンマークからオランダに行く際に、一時間の予定だった経由時間がわずかに15分ほどになってしまった。(デンマークーブリュッセル間の便が遅れて出発したため) そのため、スーツケースを次の便に乗せることが間に合わなかったのだろう。ボローニャ空港でいくら待っても、私たちのスーツケースは永遠に回ってこなかった。

仕方なく私たちは Lost Baggage のカウンターで手続きを行った。その結果、次の日の同じ時刻の飛行機でボローニャ空港まで運び、そこから私たちが泊まるホテルまで届けてもらえることになった。しかし、結局受け取るのに四日間待たされることに...

②全身に原因不明の水疱(めっちゃかゆい)ができた

最初病院に行くことを考えたが、イタリアの病院はめちゃくちゃ待たされる(医療費が無料であるため)ことを聞き、薬局で消毒薬と塗り薬を購入することに。薬局の薬剤師さんに症状を見せて状況を説明したら、どの薬を買えばいいか教えてくれた。病院に行かなくても、親切な薬剤師さんがいる薬局(Google Map のレビューは頼りになる)へ行けば簡単に薬を手に入れることができます!

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回のテーマは「レジオエミリア教育と森の幼稚園から考える自然と人間のつながり」であった。今回の旅はこのテーマに限らず様々なことを学んだが、ここで一度このテーマに対する自分なりの結論をまとめたいと思う。

私が今回訪れた幼稚園すべてにおいて感じたことは、「自分は〇〇の一部であるという感覚」が幼児にとってとても大切な感覚であり、幼稚園もその感覚を守り育てるような環境を作っているのではないかということだ。そして、私は徐々にその感覚こそが人間として生きていくうえでのすべての始まりなのではないかという考えを持つようになった。「〇〇の一部であるということ」は、A「自分は自分として独立した存在である」ということを自覚しながら、同時に、B「自分はあるものに属した存在である」ということを実感しているということである。原子（ H_2O ）に例えるなら、自分は個体（氷）でもなく気体（水蒸気）でもなく液体（水）だということ。すなわち、自分は水（の一部）であるが、自由に動き回ることができる水の一滴でもあるということだ。

〇〇にはいろいろなものが入るだろう。家族、幼稚園、友達、人間、自然、宇宙…。

大事なものはA,Bどちらにも偏らないことだと思う。Aは自由や個性、自分らしさというものに繋がり、Bは調和や連帯、人間らしさといったものに繋がる。Aに偏れば人間らしさを失い、Bに偏れば自分らしさを失う。現代はAに偏っている時代だから、人間らしく生きることが難しく、そして人間は自然の一部であるということをおぼろげに忘れてしまっている。いうなれば、人間らしさを抑圧することで、本来の自然のサイクルやありのままの自然を抑圧してしまっているのが現代の私たちなのではないだろうか。

また、現代はAに偏っている時代であると思うが、皮肉なことに自分らしく生きられている人は少ない。思うに、AとBは二つで一つなのだろう。すなわち、Aを疎かにすれば自然とBも弱まってしまわないだろうか。

「表現する」と自然の中で「遊ぶ」と。この二つにはまだまだ秘密が隠されていそうである。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

私は将来、研究者をしながら山の中にゲストハウスを併設させた幼稚園を運営したいと考えている。保育関係者が集いまなびあうことのできるゲストハウスと、子供も保育者もものびのびとできる幼稚園だ。そこにいる人間が自然との共生をゆったりと考えることができるような場所になりたいと考えている。

ところで日本にも森の幼稚園に限らず、自然の中での遊びを大切にしている幼稚園がたくさんあることを知ったので、おもしろそう！という感覚のままに日本全国の幼稚園を訪れてみたいと思

う。

また、私にとってまだまだ「人間と自然のつながり」というものが謎であるので、卒業論文ではそれを深堀できたらよいと考えている。

本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

～渡航前に計画はできるだけ綿密に立てるべし～

計画通りにいかないことも、現地に行ってみないとわからないこともたくさんあると思う。しかし、今や私たちにはインターネットと google 翻訳という強い見方がある。現地に行って土地勘をつかみ、人脈を作ってからでも決して遅くはないが、日本にいる間にできるだけインターネットから情報を集め、現地の人や団体とアポを取るなどの根回しを行い、綿密なスケジュールを立てることをお勧めする。そのほうが、自分が行きたい場所にも会いたい人にも出会える可能性が高まるし、何より渡航前や渡航中のあれもしなきゃこれもしなきゃといった精神的な負担の軽減にもつながると思う。

～困ったときはすぐ誰かに相談するべし～

トラブルが発生した際、自分の力で何とか解決しようとトライすることも大切ですが、必ずしも一人で抱え込む必要はない。特に、慣れない海外という場所でトラブルが起こった際、頭の中がパニックになって冷静に物事を考えることができなくなるケースが多いのではないだろうか。例え誰かに相談することが直接的に問題の解決に繋がらないとしても、話を聞いてもらううちに気持ちが収まり、落ち着いてもう一度客観的に物事を見ることができるようになる。(事情を知った陽気なイタリア人が励ましてくれることも)

主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費、現地交通費

*Workaway 登録料、海外旅行保険料 など

(二人分)